

# 恥ずかしい履歴書・・・そして今



橘 泰宣

Yasunobu Tachibana

昨年3月をもって、愛媛県農林水産研究所農業研究部（病害虫防除所併設）を定年退職しました。顧みると、昭和46年に農業試験場に採用されて以来、果樹試験場、病害虫防除所と38年間にわたり試験研究、植物防疫行政に携わってきました。

農業試験場（昭和46～54年）では、大学卒業後、職務上の専門知識が皆無の状態からスタートし、何も知らないということで農林省の植物ウイルス研究所で研修を受けることになった（昭和47年）。研修内容は、タバコモザイクウイルス（TMV）の弱毒系統（TMV-L11A）の利用ということで、大島信行博士の手厚い御指導を受けた。さらに、まだまだ勉強不足ということで、農林省四国農業試験場の木曾皓博士の元で電子顕微鏡での植物ウイルスの観察について特訓を受けた（昭和48年）。超薄切片用のガラスナイフ作成で満足のいくものができなくて、“OK”が出るまでに、10cm角のガラス板を大量消費してしまったことは、今では懐かしい。両先生から研修で学んだことは、一つには仕事の目標を自分なりに設定できたこと、二つには疑問があればその道の第一人者へ直接問い合わせることで、その後の防除研究の心の支えとなった。

研修後は、主として野菜類のウイルス病防除対策を担当した。昭和48年に、TMVとPVX（ジャガイモXウイルス）の混合感染によるトマト条斑病が愛媛県で初発生した。発生場所は、ジャガイモ栽培の近隣地に限られ、大島先生から分譲された弱毒系統（TMV-L11A）を利用すると、発生症状が極端に抑制されることを実証し、弱毒ウイルスの新しい利用法を発見したと自惚れ、有頂天になっていた自分が恥ずかしい。

その後、低地温下で栽培されるハウストマトが、根

部褐変とともに先端萎凋を生じ、黄化症状を呈して終いには褐変枯死に至る病気？が発生し、大問題となった（昭和48～50年）。栽培班とのプロジェクト研究が開始され、当初原因が掴めなく、ましてやTMVが関与しているとは想像だにできなかった。何故なら、ウイルス病→モザイク発症という固定観念に囚われ、そのことが原因究明に時間を要することになった。ふとしたことで、TMVの検定植物であるタバコ“キサランチNC”に被害トマト葉を汁液接種したところ、高密度な局所斑点が形成され、TMVが関与することが初めて分かった。その後、TMV感染+低地温条件（10℃以下）+連作（病原性の弱い土壤菌感染）という組み合わせで特有の症状がトマトに再現され、TMV対策とともに栽培環境の改善策を打ち出せることができた。TMVに関して、面白い問題と言えば、TMV抵抗性台木（アカナス）にTMV感受性トマト“東光”を接ぎ木した場合、TMV感染により台木部に著しい壞疽症状とともにデンプンの異常蓄積が生じ、減収になる事実が判明した（昭和52年）。TMV対策→抵抗性品種利用という対策の盲点を突かれた感がする。

昭和52、3年当時の愛媛県では、ソラマメが露地野菜の基幹作物（約1,000 ha）であり、全国的にも主要な地位を占めていた。このソラマメで栽培上の最大の問題点は、ウイルス病による直接減収であった。定植後の試験圃場で、連日の如く媒介虫である有翅アブラムシと睨めっこし、ウイルス病発生との関係を観察したところ、種子伝染株が起点となり、有翅アブラムシが急速にウイルスを媒介し、年内発病を拡大することが分かった。殺虫剤の多数回散布も試みたが、発病防止効果は殆ど認められなかった。このため、シルバー

ポリマルチを利用することで高い伝染防止効果が得られ、農家普及に繋がったことは我ながら幸いでした。外国雑誌からこの件に関し、投稿依頼があったため、自前のタイプライター“オリベッティー”を使って英文作成し、恩師である愛媛大学の門屋一臣教授に添削をお願いした。後日、先生から外国雑誌への投稿であるから、“ネイティブ”にお願いして添削をして貰うことになった。帰ってきた英文は私の原文とは似ても似つかないほどの変わり様で、それ以来、英文作成は他力本願で済ませている。農業試験場勤務時代は、病理科長であった重松喜昭先生から病理研究の初歩から応用まで、つまり何から何まで、懇切丁寧にご指導いただいた。このことに厚く感謝いたします。

果樹試験場は昭和54年以降通算20年以上にわたり勤務した所です。昭和54年、自分としては初めての人事異動を経験することになった。果樹病害に関する知識も皆無であったため、当時から優秀で熱心であった愛媛青果連傘下の技術員諸氏からの叱咤激励は日常茶飯事であった。農業試験場時代のぬるま湯的気分は一扫され、病害防除に関して、現場解決策が成立して初めて評価されることを自覚するとともに、“逆境”への耐性獲得(“しったことか精神”、“なんとかなるさ精神”とも言い換えることができ、自分では心の“圃場抵抗性の獲得”)を身に付けたと嘯っている。

昭和54年～平成元年の仕事は宮内伊予柑のかいよう虎斑病防除で、この病原のトリステザウイルス対策として、弱毒ウイルス利用による果実病斑の発症軽減と収量低減防止の実証にもっぱら従事し、優良無病母樹の育成と関係団体との密接な連携・協力の下に弱毒苗木の農家配布を実施しました。これも偏に、現場で積極的に農家指導している農協技術員諸氏の叱咤激励や大いなる協力があつたればこそと深く感謝している。この間、優良母樹園を設定するに当たり、異品種の混入問題があり、関係各位に大変なご迷惑をおかけした。幸いにも、「品種更新事業」を利用して、団体主導により混入母樹の早期排除に成功した。教訓としては、“急いで事は仕損じる”であった。また、当時キウイフルーツの栽培がブームであり、導入初期は病気に強いと宣伝されていた果樹であったが、事実は全く異なるものであり、やはり普通に弱く、そのため新病害の果実軟腐病の防止対策にはかなり手こずった。なお、

導入果樹でこれほど日本に定着した果樹はきわめて稀であり、“奇跡の果樹(ミラクル・フルーツ)”とも称されているようです。

防除所持代(平成17～20年)は、有能な職員に支えられ、病虫害発生予察業務や植物防疫事業等の日常業務を何とかこなしてきたというのが実感です。ただ、印象に強く残ることといえば、果実侵入害虫であるミカンバエ問題(消費者イメージ等の観点から県内発生を公表していなかった事)が表面化し、地方新聞に「ミカンバエ」と題する社説が掲載されたことにはかなり驚愕した。なお、公表されたことにより、これ以降、防除所としての本来業務である防除対策指導がやりやすくなったのは正直なところ救いでもあった。

退職後、昨年4月からは、愛媛県立農業大学校に非常勤講師として勤務しています。周知のように農業大学校は、農業改良助長法に基づく農業者研修教育施設として、次代の農業を担う青少年を育成するとともに、農業者の経営能力向上等を図る各種の研修を実施するために設置されているものですが、昭和46年の発足以来、約3,000人近くの卒業生を送り出し、地域農業の発展に貢献する人材の育成に努めています。

現在の農業大学校をとりまく情勢も大きく変化しており、「担い手の育成」については農業後継者の育成から就農形態の多様化に対応した人材養成へと移行しているようです。

周知のように、我が国の農業で最大の問題は、農家の後継者不足であり、農業の担い手と言えは“金の卵”です。さりとて、農業教育に甘えは禁物でもある。松山中学へ赴任した夏目漱石は“愚見教則”に「教師が生徒の機嫌をとるようでは、立派な人間を作るどころか生徒が増長し、教師の値打ちが下落する」と生徒と先生との関係を指摘している。愛媛農業の担い手育成の一助となるべく、自省して努力したい。私の担当講義は、一般学生を対象にして「病虫害と防除計画Ⅰ&Ⅱ」、「植物病理学」、「植物生理」、「環境保全型農業」、「植物調査法」、「先進事例研修」等を受け持っていますが、社会人を対象にした「農業担い手支援塾」で「野菜・果樹の病虫害防除」についても担当しています。

以上、徒然なるままに駄文を披露したことをお許しください。 松山や 秋より高し 天守閣(子規)  
(元 愛媛県病害虫防除所長)